

光明寺

光明寺は西山浄土宗の総本山です。西山の麓にある広大な寺院は、直訳でピュアランドを意味する浄土宗の開祖 法然（1133 年～1212 年）と歴史的に深いつながりがあります。光明寺は紅葉の名所としても人気です。見どころは、御影堂へ続く石段と山門から左手に続く約 200 メートルの「もみじの道」です。およそ 250 本の木々がトンネルとなり、春と夏は鮮やかな緑、秋は燃えるように色づきます。

略歴

光明寺の起源は 1198 年、法然の弟子、蓮生僧（熊谷直実、1141 年～1207 年？）が念仏三昧院を建立したことに遡ります。法然の教えは、無限の光と命の仏である阿弥陀の名号を儀式的に唱える念仏の実践を中心としていました。

寺伝によると、1228 年、法然上人の 17 回忌の際、法然の石棺から光線が発せられ、その光が念仏三昧院に届いたとされています。寺に運ばれた法然上人の遺骸は火葬され、境内に安置されました。その後すぐに、寺名は仏教において精神的な意味合いをもつ「輝かしい光」という漢字を用いて光明寺と改められました。

御影堂・阿弥陀堂・釈迦堂

御影堂は 1754 年に建てられた、光明寺の本堂です。本尊は法然上人の張り子像で、母からの手紙の用紙をもとに法然上人自らが制作したとされます。御影堂の裏手にある急な階段を上ったところに法然上人の遺骨が祀られた霊廟があります（非公開）。法然の石棺と火葬場は、それぞれ阿弥陀堂と釈迦堂の近くにあります。

阿弥陀堂には、高さ 2 メートルの阿弥陀如来像が安置され、その両側に勢至菩薩と観音菩薩の小さな仏像が祀られています。阿弥陀様の手指は、浄土への信者の魂を迎える印相（ムードラ）を形づくっています。このお堂は 1799 年に建造され、平安時代（794 年～1185 年）の伝統的な浄土様式の特徴を表していると言われています。

1736 年に建立された釈迦堂には、釈迦如来が安置されています。お堂の正面には、数々の石が丁寧に配置された枯山水庭園があります。中でも最も大きな 3 石は阿弥陀如来、勢至菩薩、観音菩薩を表し、他の 18 石は浄土宗の教えの基礎である阿弥陀仏の四十八の誓願のうちの第十八願を表しています。それは、極楽に生まれたいと願って阿弥陀如来の名号を唱える衆生を救い、極楽浄土に往生させるという願です。庭園の反対側にある勅使門は主に朝廷からの使いである勅使が使用した門です。